

# 浦賀文化

平成19(2007)年4月1日

第10号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

編集・発行:横須賀市浦賀文化センター

〒239-0822 横須賀市浦賀 7-2-1

TEL&FAX 046-842-4121

## 『大衆帰本塚の碑』

### 変わりゆく故郷への思い

市民に広く親しまれ、将来にわたって保存の必要があるとして平成十五年に「市民文化資産」に指定された大衆帰本塚の碑は、何を語り、何を伝えようとしているのでしょうか。

「大衆帰本塚の碑」は浦賀駅から徒歩五分ほどの浦賀警察署横の歩道に面してあります。高さ二二六cm、中央幅二一〇cmで安山岩の中心でも板状節理が発達した根府川石を自然の形そのまま使用しています。この石碑は、一八六四(元治元年)九月に現在の浦賀警察署裏山の中腹に建てられました。近年の浦賀地域の再開発により、一九九七(平成九年)に現在の位置に移設されました。碑が建てられた当時の周辺の様子は碑文のほか、「浦賀道見取絵図」「浦賀中興雑記」などの資料によると沼地があつて蟹田(がんだ)川が流れ、一部は荒地で浦賀の町の外れであつたと思われま



浦賀警察署脇に立つ大衆帰本塚の碑

出たことが大きく影響しています。「大衆帰本塚」の名前は久保土佐守忠董の発案ですが、仏教用語で読み解くと、このよ

るべき物に戻る」と読み取れます。碑文は当時の風景、碑を建てる経緯を語っています。後半部分から推し量ると、開発の波にさらされその姿を変えつつある「ふるさと浦賀」に対する三郎助の思いが感じられます。

保土佐守忠董が墓地・火葬場の移転、無縁仏の埋葬と記録を残すことを定めた。町民全てが厳粛に受け止め、中でも川島平吉が一番熱心に活動をし、経過、理由を、また石の選定を行い千年の後も忘れさせないよう、桜の木を植えて昔の人の魂を慰めた。「なんと素晴らしいことである。」と言っているのは浦賀奉行所に仕えている中島三郎助永胤である。

#### 碑文要約

この辺りの昔の様子は、沢のほとりに田んぼがあり、葦蟹などもいたので蟹田と呼んだのである。山陰の荒れた野原で、葬りの跡を訪れる人以外は入つてこない草むらになつてゐる。

#### 参考文献

- 大衆帰本塚について (横須賀市教育委員会)
- 中島三郎助文書 附冊 (中島義生編・発行)
- 浦賀与力 (中島三郎助の生涯 (山本詔一著))
- 元治元年甲子秋九月 扇江九萬橋が彫る
- 篆書は大畑春国

## 西浦賀町一丁目(紺屋町)

【語る人】 財部 齡子さん(元・タカラベ写真館)

### 【時代の流れを知る写真館】

江戸時代に廻船問屋を営んでいた紀伊国屋六兵衛の子孫として宮下で生まれました。子どもの頃、花見の季節になると愛宕山には提灯が飾られてとても賑やかでした。昼間も宴会があり、「かつぼれ」を踊っているのを見ては路地で見よう見まねで踊って遊んだものです。夏になると町内で作ってくれるやぐらから海に飛び込んで、港の真ん中にある大きなブイまで泳いだりもしたことを思い出



現在の紺屋町界限

だします。 女学校卒業後、東京深川に移り住みましたが、東京大空襲で焼け出されて浦賀に戻ってきました。主人がオリエンタル写真学校出身だったので、最初は修整えんびつ一本で写真館を開業しました。後にカメラ一式を自転車に積み、浦賀、ドック・結婚式場・学校などで出張撮影をしました。今と違って昔は天候により明るさが左右されたためにいろいろと苦労が絶えませんでした。写場(スタジオ)を持つようになってからは、七五三で一年分を稼いだ時期もありました。昔、写真はとても貴重なもので、写真館の名前がローマ字で入っている洒落た台紙に貼られ、大切に保存されていました。デジカメなどが普及して、時代の変化には驚いています。

## 東西風

尺という漢字は、手首からひじの曲がり目までの長さを表すものだそうです。それなら人

によつてその長さは、みな違いますがそれでも一つの基準として使われてきました。身体を基準にしたものは、ほとんどすべてびつたり同じなどというものはありません。その少しの誤差が人のゆとりであるうと思ひます。このゆとりが文化を生む原動力です。しかしこうして生み出される「文化」というものをある尺度で図ろうとするのはよくありません。それを強制して、「こうであらねばならぬ」というようになるとそれはファッショであると思ひます。様々な意見や批判があつて文化は成り立っていると私は思ひます。「浦賀文化」へのご意見、ご批判を。(山本)

**浦賀文化センター**  
(郷土資料館)  
浦賀駅から浦賀通りを徒歩10分

所在地:横須賀市浦賀7-2-1  
電話: 046-842-4121  
FAX: 046-842-4121

浦賀の植物

クロマツ(オマツ) マツ科

大前悦宏

神奈川県植物誌調査員

松といえば松原・松林などが思いだされるほど、日本人は松が好きなのでしょう。日本三景には全部松があります。それもクロマツ。白砂青松という言葉は今でもマスメディアに登場しませんが島国(海浜)の日本人のこころに特別な思いがありました。また、好きな色は白(清浄無垢)・青(空の青さそれを反映する海や湖沼、水流の青さ)鮮やかな青・鮮やかな緑・深い青といわれます。

松といえれば松原・松林などが思いだされるほど、日本人は松が好きなのでしょう。日本三景には全部松があります。それもクロマツ。白砂青松という言葉は今でもマスメディアに登場しませんが島国(海浜)の日本人のこころに特別な思いがありました。また、好きな色は白(清浄無垢)・青(空の青さそれを反映する海や湖沼、水流の青さ)鮮やかな青・鮮やかな緑・深い青といわれます。

クロマツの雌花



で上に数個の雌花が、新芽の根元に群がって雄花が咲きます。オマツのクロマツに少しメマツと呼ばれるアカマツは植物体の雌雄の区別ではありません。アカマツは、幹肌が明るく赤く美しく、葉も細くて柔らかいところから「女性的」に見えるのでメマツと呼ばれているわけです。

マツが病害虫のために大量に枯死する姿はつらいもの。秋の彼岸時に古俵を巻き、中に越冬する松食い虫を春の彼岸の頃取り外し焼き捨てたり(冬そして春の

訪れを告げてくれませぬ)、薬液を幹に注入して防除する方法などが取られています。松林全体が枯れてしまふことはまずありません。

去る一月十九日から二月十六日の毎週金曜日全五回にわたり『幕末・浦賀の人々と生活』と題し歴史講座を開催しました。定員六十人のところ百十四通ものご応募をいただき感謝申し上げます。山本詔一先生のお話を堪能し、幕末の浦賀の人々に思いを馳せました。受講された方も、抽選で外れた方も次回のご応募をお待ちしています。市の広報浦賀公民館ニュース等でお知らせします。ご期待ください。

歴史講座開催

歳書

佐々木 謙 著

集英社新書

江川英龍・中島三郎助

榎本武揚が追った夢

五稜郭に散ったサムライたちの夢。だが、彼らが築いた近代技術こそが、明治国家のプロジェクトを準備した！

浦賀文化センター開館25周年

異常な速さで春到来、そんな中、平成十九年度がスタートしました。横須賀市では市制百周年のイベントが目白押しですが、浦賀文化センターも開館二十五周年を迎えます。昭和五十七(一九八二)年四月二十四日に、浦賀及びその周辺の「歴史・文化に関する啓蒙及び学習の場」「歴史・民俗資料の活用場」「資料収集と研究者の用に供する場」「住民の文化活動の場」を目的として開館しました。

来館していただいた多くの方々に支えられ年を重ねることができました。横須賀市では市制百周年のイベントが目白押しですが、浦賀文化センターも開館二十五周年を迎えます。昭和五十七(一九八二)年四月二十四日に、浦賀及びその周辺の「歴史・文化に関する啓蒙及び学習の場」「歴史・民俗資料の活用場」「資料収集と研究者の用に供する場」「住民の文化活動の場」を目的として開館しました。

紺屋町の稲荷社修復



ペリーが浦賀沖へ来航する二年前、嘉永四(一八五二)年七月五日、奉行所へ一通の願い書が提出された。願い主は浦賀で一番大きな問屋の主・大黒屋儀兵衛で、願い事は西浦賀の紺屋町の稲荷社を修復する資金を助成するため「力持ち」の興行を許可してほしいというものであった。

紺屋町の稲荷社は宝船稲荷と呼ばれ、愛宕山の上り口にあるが、この稲荷社が大破し、修復の資金を助成するための興行であった。

稲荷社を一つ造るくらい、大黒屋の資産からすれば、何でもないのであるが、その資金をすべて大黒屋が拠出してしまつと、紺屋町の稲荷社ではなく、大黒屋の稲荷社になってしまうので、「分」をわきまえた行動であった。「力持ち」の興行を行うところは、築地新町五丁目(現・住友重機械の浦賀工場跡地内)に、十二間四方の会場を用意した。

願い書は、定廻り衆といい、現在ならさしずめパトロール隊の人に内々で見せて指導を仰ぎ、それから奉行所へ提出された。七月十二日には、願い書を受け取った奉行所からペリーが来航した時に偽奉行として大活躍した香山栄左衛門や中島三郎助とともに函館まで行き、函館で戦死をした柴田伸助らが、西浦賀村の名主・年寄をはじめ、願い主の大黒屋とその組合(五人組)の人々とともに興行場所の実地見分を行い、農業にも交通にも支障がないことが確認された。

歴史語り座・浦賀 ⑩

郷土史家 山本 詔一

興行は七月二十一日より晴天五日と決つた。興行初日、力持ち一行の到着が遅れ、初日を一日繰り延べにしてもらう許可と、さらに今晚「触れ太鼓」を回してよいかの許可を願ひ出た。この興行の木戸銭は、大人が八十文、子どもは四十八文、土間に座つて見ようとすると四百文、棧敷になると約百文、ということは大黒屋の木戸銭は八百円ぐらい、棧敷で観ると八千円ということになる。

興行の間に世話になつた村役人や奉行所の役人を招待し、特に奉行所の役人はお昼前に来れば昼食を出し、午後になってからなら折詰を持たせる用意をするほどの気の遣いようであった。どうも浦賀の町は、奉行所の役人たちの饗応が過ぎていたようであり、接待をうけなれてはいた奉行所の役人は商人に対して何もいえない状況があつたようだ。

それでも、こうした興行ができるおかげで、稲荷社の修理が町の人たちにそれほど負担なくできたのである。この同じ場所でも八月には谷戸(浦賀七丁目)も稲荷社修復のための曲独楽興行の願ひが出されている。



「力持ち」の興行で修復された宝船稲荷